

# 子どもとリズム

附屬幼稚園 清水光子

幼稚園で子ぎもこの生活を始めて私がした時の大きな印象の一つは、子ぎもが何でもに拍子をつけ、ふしをつけて言ふことであつた。これは自分の幼い頃の記憶をたぎつて

見れば何の不思議でも、新しいことでもないし、以來幼稚園での日を重ねるに従つてあたり前すぎる程あたり前な事になつたのであるけれど、持前の詮索好きから氣のついたまゝに手帖にかきつけて置いた。

ラヂオをみんなで聞く様になつた最初の頃「ラヂオでお話があるのよ。聞きにいらつしやいな」を呼ぶにさつそく「○○○のくーみ、ラーヂーオ」を、若しこれを樂譜にかいたならば



こいふや  
うにうた  
つてお友

達を呼んだので、ラヂオこいふ所ののぼし方が面白いなと思つた。斯ういつた種類のうたは大分あるので、それから氣をつけてかきつけて見たのを書いて見る。

○○○のくーみ、ーおーゆうーぎ

(おーべんご、おーぶかき)  
おーしようか、等同様)

ーまゝごごーするものーこのゆびーさまれ  
ーかくれんぼーするものーこのゆびーさまれ  
ーあしたつぎーするものーこのゆびーさまれ  
(せんそうごご、おにごご、等同様)

ーせんせいーよーりーたーかーい！  
ーあしたはーてんきかーあーあめーかー  
ーアーララーコララ、ー○○○○ーさんは、  
ーいけなひんーだ

この他まだく大分あるが最も普通なものはこちら等で、

英詩の韻の様に區切りをつけてみる。前のやうに區切れ、一區切りの中はみんな同じ様に強弱、強弱をなす。これ等のうたを若し譜で書くとしたら皆一拍子になる。又お友達の名にふしつけて呼ぶのをきをつけてきく四字の場合、例へば武彦チャンさいふ時は一タケヒコチャン、と言ふが清チャンさいふ様な三字名の時は一キーヨシチャンさいふ様にのばす。これは「林の組おべんさう」さいふ時の一ハヤシノクームーはいゝが池の組になる。一イーケノクームーのばすのと同じである。子ぎもは全く自由になんでもうたにし、リズムカルにするのに都合のわるい所は勝手にちぢめたりのばしたりしてゐるのが私には大變に面白いと思はれた。

或時音樂の先生からドイツの子ぎもの爲の音樂の本をいたゞいたが、斯ういふのはまだ日本では見た事がない様で、興味深く思はれた。それはおたまじやくしの様な樂譜のかはりに、そのうたの繪が音符の代りをしてゐるのである。蜂のブン／＼言ふのをうたつた歌なら蜂が音の高低に従つて高く、低く及び、強弱は形の大小で表してある。子

ぎもに見せて、その繪をさし乍ら一しよに歌つて見たら、随分面白がつてよく覚えてしまつた事があつた。

○

或年の七夕祭りの用意で、笹をかざるいろ紙のリボンを作つてゐた時、赤、ひわ、黄、紫、まき色、等の色の紙を輪にしてつなぐのに、子ぎも達がめい／＼思ひ／＼に色をえらんでつなぎ乍ら、まきの子もちやんま繰返して色を入れてゐる様なのに氣がついたので、たしかにくり返しをしてゐるかぎうか、そつましらべて書いてみた事があつた。こちらは何色の次は何色さいふ様な指示は一切しないのに殆どまきがくり返しをしてゐるのであつた。それで別の時、機會ある毎に子ぎもがつくる色、又は形の配列を書付けて置いた。それを出してみるまきの場合も同じ様にリズムカルな配列をしてゐる。オモチヤの店かざりの紙リボン作りや、おもちやにつける模様、お人形のお着物の模様、等全然子ぎもの自由にまかせた配列で、たゞ色数だけ與へたのであるがその結果はいつも同じであるのも面白い。

例をあげるま赤白、赤緑、まき色ま黄色の様に二色を組

合せて作った配列では、全部で材料の數七〇の中リズムミカルの配列をしてゐるのが六十一ある。そのうち九つだけが繰返しをしてゐない、即リズムミカルな配列のないものである。この數から殆きがリズムミカルな並べ方をしてゐる言へるであらう。その中には一つ一つ交互に並べたものが最も多く、次は二つづゝ交互に、それよりづつ三つ三つづの交互、更に少いのは或長さ全體をまきめて二つの繰返しをしましてゐるもの、二つに一つをいふ並べ方は六十一の中一つだけであつた。

色が三つ以上になるに記録の數が少く、明確な結果が出ないけれど、三種の色の場合十四の材料の中七つは完全にリズムミカルな配列をしてゐる、残りの中四つは途中でそれがまよつてしまつてゐる。

この他、形がちがふ二種のを配列した時の記録もあるが數をあげる程でないのだけれど、これでも多數のものがリズムミカルな配列をしてゐる。

以上は横の記録のまきめであるが、縦に、一人の子きもについて見るに特別にリズムに敏感な子きもあるし、

反對にさうでない子きもある。そして色の場合、赤赤、緑緑、赤赤、緑緑といふ様に配列する子きもは形のちがふ場合も二つづゝ配列してゐるのは不思議な程であつた。

以上の事は全然單なるつまらない記録に過ぎないし、何か結論が出せるものであるならそのほんの門口に過ぎない。たゞ子きもがリズムに興味ある態度を示すこと、單にうたばかりでなく、色や形にまでさうであることは言へやうかと思ふ。面白く思つたので保育個人日誌の隅つこからかき集めて書いてみたのである。